

景観フォーラム

巻頭言

政権中枢の腐敗が止まりません。まるで、その腐臭が匂ってくるまでに墮落しきっております。安倍晋三首相の政治手法は殆ど民主主義を無視したやり方であり、選挙で多数派を取れば何をやっても許されるということでしょう。これはナチズムと同じ方法であり、まるであの時代に帰ったのかと疑いたくなります。以前の自民党ですと、政権与党の中から自浄作用が現れたものですが、それが無いとすると余程の腐った集団になり下がったのではないのでしょうか。安倍晋三を筆頭に自民党国会議員の半数以上が二代・三代目の政治を職業とする家柄であり、彼らの考え方の中には国民の目線というものは殆ど失われているのでしょうか。即ち、政治家ではなく政治屋となり下がり、自浄作用など望むべくもありません。

さて、安倍政権への批判はあるものの、40%以上の支持率を得ており、それは高い就職率とまあまあの経済の向上が証明しているとのこと。では政治家は、それさえやっておればいいのか。戦争をやることによって良い経済状況を偽造してきた政治家は多々おりますが、結果的には不幸を背負うのは国民となるというのが過去の歴史でした。戦争ではありませんが、安倍政権はギャンブル法を通し、経済を向上させようとしております。パチンコ街がコミュニティを荒廃させるのは経験済みです。「景観から考えるまちづくり」からしても、真逆の方向です。経済が経世済民（世を経(おさ)め民を済(すく)う)である以上、この法案は経済活動の本質を悪くするものであり、また人権を無視するものです。経済が良くなるのであれば何でもアリというのは政治ではありません。このように、正義がなくなってしまった政治というものが人権をないがしろにしてしまうというのも歴史が証明しております。政治とは正義を追求するものであることを忘れてはなりません。

以上の状況に対してどのように対処したらいいのでしょうか。私たちの「景観から考えるまちづくり」は正に民主主義の根幹をもう一度実践しようとする運動です。一人ひとりがどのようにしたら景観とコミュニティを良くすることができるかと皆で話しあうことが必要ではないのでしょうか。自ずとそこから正義とは何かという問いかけが生まれてくるのは必定です。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 斉藤全彦

<日本景観フォーラム2018年度（平成30年度）年間スケジュール>

*2018年度とは2018年4月1日⇒2019年3月31日のことです。

2018年

- 4月24日（火）第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 5月23日（水）**第1回景観研究会（香取市佐原の景観）** 於JICA研究所
- 6月16日（土）**第1回景観まちあるき（香取市佐原）**
- 7月24日（火）**第2回景観研究会（歴史的文化的景観まちづくり）** 於JICA研究所
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）or 一泊二日で遠方の町並み見学会など？
- 9月25日（火）**第3回景観研究会：道路と景観** 於JICA研究所
- 10月27日（土）**第2回景観まちあるき（桜川市真壁）**
- 11月20日（火）第2回理事会 於JICA研究所
- 12月13日（木）忘年会（場所未定）

2019年

- 1月26日（金）**第4回景観研究会：都市美と景観** JICA研究所
- 2月14日（水）**第5回景観研究会：都市美と景観（2）** JICA研究所
- 3月24日（土）**第3回景観まちあるき（桐生市桐生新町）**

アートの窓②

長谷川利行展（2018年5月19日－2018年7月8日：府中市美術館）をみて

長谷川利行（1891－1940）という画家をご存じだろうか。岸田劉生（1891－1929）と正に同時代の画家と言えるだろう。知る人ぞ知ることではあるが、彼の作品もぼろぼろと発見されているこの頃だという。荒々しいタッチで描き、その色使いは原色を多く使うぐらいの知識しかなかったが、今回、この展覧会を観て、自身の美というものに対峙する覚悟が揺らいだ感じがした。こういう画家がいたのだ。自己の美観をこういう形で示せる人間がいたのだ。そして、美術館を出て、府中公園の中を駅の方に向かってゆく胸中は何かと柄にもない寂しい気持ちで一杯であった。生活は困窮を極めながらも、友人からの借金で絵画一筋に49歳で野垂れ死にするという生涯とは一体何だったんだろうと。

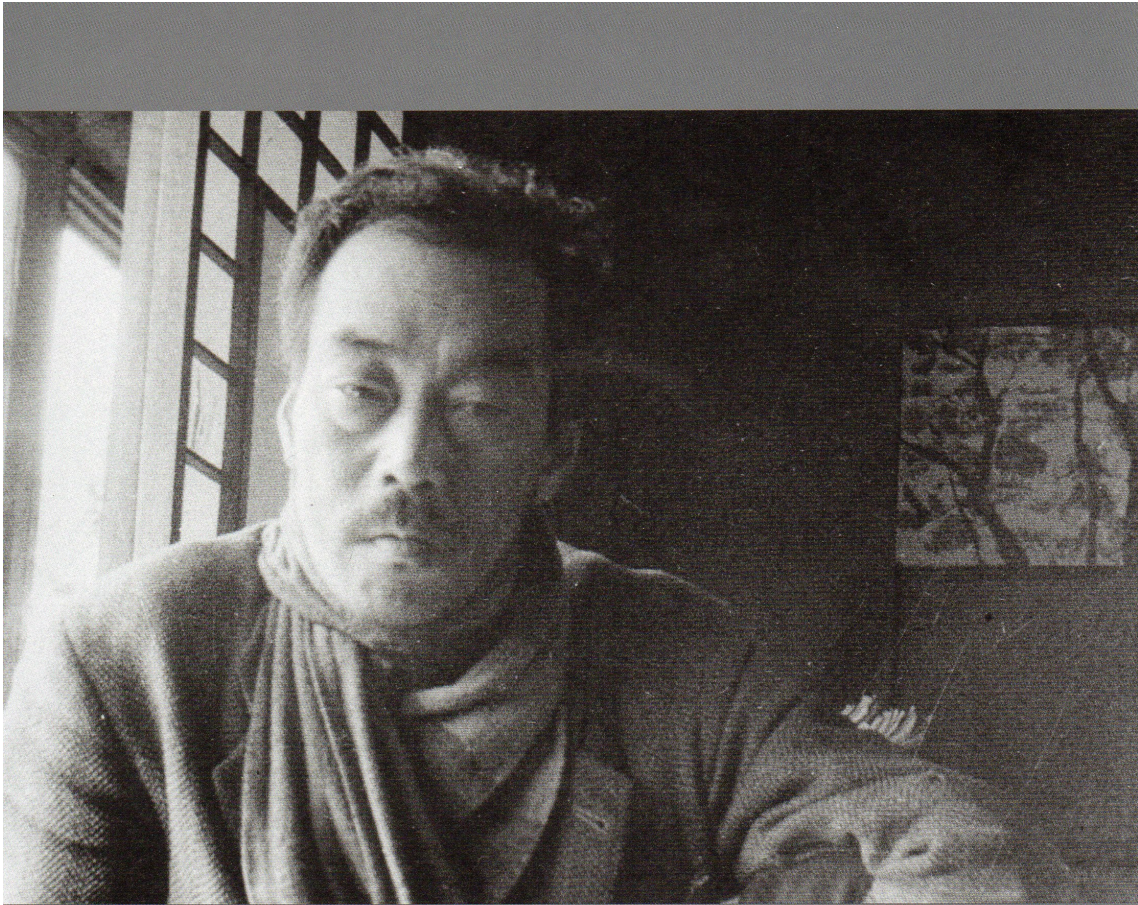
生前は美術展で数回は賞を取ったと言われているが、生活を支える程のものではなかった。即ち絵では食えなかったということである。そういう意味で、ゴッホに似ていると言われる。それは絵のタッチや色彩感覚でもいえなくはないが、実際の作品を前にするとゴッホとは全く異なる長谷川利行の確立した独自の絵画世界がある。早描きであると言われる作品を観ていると、これが2時間ぐらいで書いてしまったものかと信じがたい。彼は、所謂アウトローというかつこいい表現が似つかわぬ生活をしていらしい。即ち、家がない路上生活者であったという。ではどこで描いていたのか。路上で描き、大きい作品となると、友人のアトリエで描いていたらしい。恐らく常識では考えられぬ性格を持った人物であったということが、彼を知っていた人々は彼の死後口を閉ざしていたということに想像できる。

長谷川利行の生涯を俯瞰すると、いつ絵を描き始めたかが証明できない。京都生まれの彼は京都で旧制中学を卒業して、30歳ごろまで文学関係の雑誌に詩歌を投稿していた。所謂詩人である。そして30歳から東京に出てきて32歳になったとき、突如8号位の油絵「田端変電所」が公募展で入賞する。「岸田国土像」、「酒祭・花島喜世子」などの人物像で有名になったが、恐らく彼の真骨頂は風景画だと思われる。彼が生活したのは、上野・浅草・田端付近、浅草・山谷付近そして新宿というほんの限られた界限に過ぎぬが、「浅草停車場」「地下鉄道」「夏の遊園地」「カフェ・パウリスタ」など生活の風景が多くみられる。自然の風景は大島に渡るとき船から見たであろう「大島の海」と「伊豆大島」のみである。彼は、浅草とか新宿の人が集まるところの風景を多く描き、それが出来ないときには人物像と裸婦を多く描いた。中には「風景Townscape」というのもあるくらい風景を好んで描いた画家であった。それも人の多く集まる雑踏の都会である。

さて、この時代は岸田劉生筆頭の高村光太郎・萬鉄五郎・斎藤与里・清宮彬・木村荘八の画家らが活躍していた白樺派の時代でもある。白樺派に属する人たちは上流階級の人びとであった。芸術大学を出てフランス留学から帰国してきた画家などが日本独自の油絵画を模索していた運動である。この頃に生きていた一般庶民はこのような運動は全く知らなかったともいえるのではない。むしろ明日の食いぶちを求めて生きている人間がほとんどであったことを考えると、長谷川利行の油絵の数々は何故かその一般庶民の風景を感じてしまうのである。白樺派の時代に、一方では長谷川利行のような画家が活躍していたという事実が驚きでならない。

この時代を考えると、上流階級には白樺派という道徳を高く掲げた芸術運動があった一方、民衆の世界は長谷川利行のようなどろどろとした混沌としてそして力強い世界とがあり、庶民のエネルギーはこれからどこへ向かって行こうとしているのかわからない、第二次世界大戦前の時代とはそのような雰囲気ではないかと想像する。まさに、そのエネルギーが日本社会に226事件を序奏として戦争という暴力の世界に突入せしめたのではない。絵画は単に美の世界を表現しているに過ぎぬが、長谷川利行の絵を観ていると何故かそんなことなどが頭に浮かんでくるのは私一人だけであろうか。（小淵 洋）

アートの窓②



1939年 久野文夫撮影

長谷川利行展

七色の東京

HASEKAWA
Toshiyuki
Retrospective:
The Indiscence of Tokyo

関東大震災から太平洋戦争の直前まで、昭和初期の東京を歩き回り、怒濤のように描きまくった画家がいました。近代化が進む荒川・隅田川沿い、千住のガスタンクやお化け煙突。隅田公園にできたばかりの屋外プール。あるいは浅草の神谷バー、カフェ、地下鉄の駅の賑わい。その街に暮らす、カフェの女給や浅草の芸人、質屋の子守といった無名の人々。復興進む大東京の光と影を、七色に輝く絵の具で描きとめました。

長谷川利行（はせかわとしゆき、1891-1940）、通称リコウ。京都に生まれ、20代は短歌の道を志し、30歳を過ぎてから上京。ほとんど独学と思われる油絵が二科展や1930年協会展で認められます。しかし生活の面では、生来の放浪癖からか、浅草や山谷、新宿の簡易宿泊所を転々とするようになり、最後は三河島の路上で倒れ、板橋の東京市養育院で誰の看取りも無く49年の生涯を閉じます。

利行の絵はその壮絶な生き様からは想像できないほど、明るい輝きに満ちて、時に幸福感さえ感じさせます。奔放に走る線、踊るような絵の具のかたまりが、行く先々の現場で描いた利行の目と手の動きをそのまま伝えます。本展では、近年の再発見作《カフェ・パウリスタ》《水泳場》、約10年ぶりの公開となる《夏の遊園地》、そして新発見の大作《白い背景の人物》など、代表作を含む約140点で利行の芸術の全貌を紹介します。

アートの窓②



長谷川利行展

七色の東京

HASEKAWA
Toshiyuki
Retrospective:
The Iridescence of Tokyo

2018年5月19日[土]—7月8日[日]

休館日：月曜日 開館時間：午前10時から午後5時（入場は午後4時30分まで）

観覧料：一般900円(720円)／高校生・大学生450円(360円)／小学生・中学生200円(160円)

※()内は20名以上の団体料金、前売り料金、前売り券は、5月18日まで府中市美術館、セブンイレブン、ローソン、ミニストップなどで販売します。

※未就学児および障害者手帳等をお持ちの方は無料。※府中市内の小学生は「府中っ子学びのバスポート」で無料。※一部作品の展示替えを行います。

前期：5月19日(土)—6月10日(日) 後期：6月12日(火)—7月8日(日)

主催：府中市美術館 後援：朝日新聞社 協力：長谷川利行の会 企画協力：一般社団法人INDEPENDENT

府中市美術館
Fuchu Art Museum

東京都府中市浅間町1の3
www.city.fuchu.tokyo.jp/art/
ハローダイヤル 03(5777)8600



日本のリビエラとも呼ばれる真鶴をアートのまちに？

神奈川県真鶴町は箱根火山の南東に位置し北の小田原市と南の湯河原市に挟まれる。海岸部と山地からなる面積7.05キロ平方メートル、人口8000人弱の真鶴半島に位置しており、北に箱根、南に相模湾を望む半島斜面地からの眺望は、南フランス・イタリアの地中海沿岸に良く似ているといわれ、日本のリビエラと呼ばれています。真鶴の山側で採掘される「本小松石」は箱根火山噴出の熔岩です。香川県の「庵治石」、茨城県の「稲田石」に並ぶ日本三大名石の1つとされており、1964年東京オリンピック開催の前年には日本初の「石彫シンポジウム」が開催され、世界各国より石彫家が真鶴に集い彫刻シンポジウムが開催されました。

都心より鉄道や車でわずか一時間半という距離でありながら、その美しい風景や特徴は知られておらず、また湯河原や箱根といった関東屈指の観光地に阻まれ交通手段の整備が遅れていることから、人口現象と高齢化の問題に直面し、数年後には真鶴の地名すら忘れられてしまっているのではないかという思いを私のみならず危惧される方々が大勢います。

真鶴の美しさ、そして素晴らしい景観を一人でも多くの方々に知っていただきたい、そんな思いからアートと真鶴を関連づける方法がないものかと色々なことを考えるようになりました。それが真鶴野外石彫美術館として街全体を美術館にしてしまう私の勝手な発想です。

最初に思いついたのは、日本で初めての彫刻シンポジウムを開催した真鶴。2020年の東京オリンピックに向けて二度目のシンポジウム開催こそ、真鶴の名前と本小松石の素晴らしさを再び海外に知って頂く為には大変良い機会だと思います。

海や山に囲まれ日本のリビエラと呼ばれる地形は都会の喧騒から一線を隠した大変貴重な空間です。シンポジウム開催時期に合わせ、石彫を主とした彫刻が街に点在することで、訪れる観光客にとってさらなる楽しみとなることでしょう。また、このシンポジウムを一つのきっかけとして、一過性のイベントではなく、国内外からの観光客や人口増加等、真鶴を訪れる人々を増やすことは今後の真鶴にとっての課題と思われます。

例えばアートバスを走らせ、様々な彫刻展示の場やイベント会場へと運ぶ。以前、海外を訪れたときには、毎週開催されるアートマーケットを訪れました。定期的なイベントが海外からの観光客を呼び、いつ行っても賑やかで、そして質の高い作家制作による雑貨を購入することができました。都心から近い真鶴も作家が集まり作品を売ったり買ったりすることで、新たなコミュニケーションの場となるのではないかと、天気の良い日にはきっと楽しいに1日となることでしょう。

真鶴をアートの街にする為には、作家の存在は不可欠です。大学を出た若いうちの若いエネルギーのある作家が住み活動をしていく、それには自治体が作家に対して何かしらの後押しをしてあげられれば良いのですが。そうすることにより作家の移住も夢ではありません。また美術大学と連携して夏休みには美術学生に制作の場として施設を提供したりなど、大学のアートのための合宿所を作るのも一つのプランだと思います。自治体が作家に対してなんらかの理解ある配慮があれば真鶴の制作環境は素晴らしいことでしょう。私は長野県の安曇野市出身ですが街中の色んなところに道祖神があります。まちの道しるべとなって皆に愛されており、この道祖神的な役割をアート作品が果たせたら真鶴半島全体が美術館のようになってとても魅力的な街になるのではないのでしょうか。

若手の作家が真鶴で制作し、作品を発表する。やがて真鶴出身の国際的に活躍する作家も生まれるでしょう。そうでなくても作家が真鶴で家族とともに暮らし、その子供がまた作家となる。そんな想像をしていたら、こんな発想も悪くはないのではないかと思います。

真鶴の未来を作家が担う、そんな発想が同時に現在疲弊する彫刻界に光を注いでくれそうなそんな気にもなりました。（いりや画廊社主：中村茂幸）

<LFJブックレビュー58>

『ローマが風景になったときー西洋近代風景画の誕生』

小針由紀隆著 春秋社 2010年刊

景観を論ずる前に私たちの脳髄の中にあるものは恐らく風景というものである。風景は人それぞれが個々に描き目に入るまたは心に浮かぶ外観そのものである一方、景観は人々が共通観念で交換し得る外観並びに共通体験であろう。英語では風景はsceneryで、景観はLandscapeとでもおおざっぱに表現できるのではないか。即ち、風景は主観性を重んじ、景観は客観性が主軸になると言えよう。このような観点から風景が芸術の表現として人々を席卷してきたのは納得がいくのではないかと思われる。

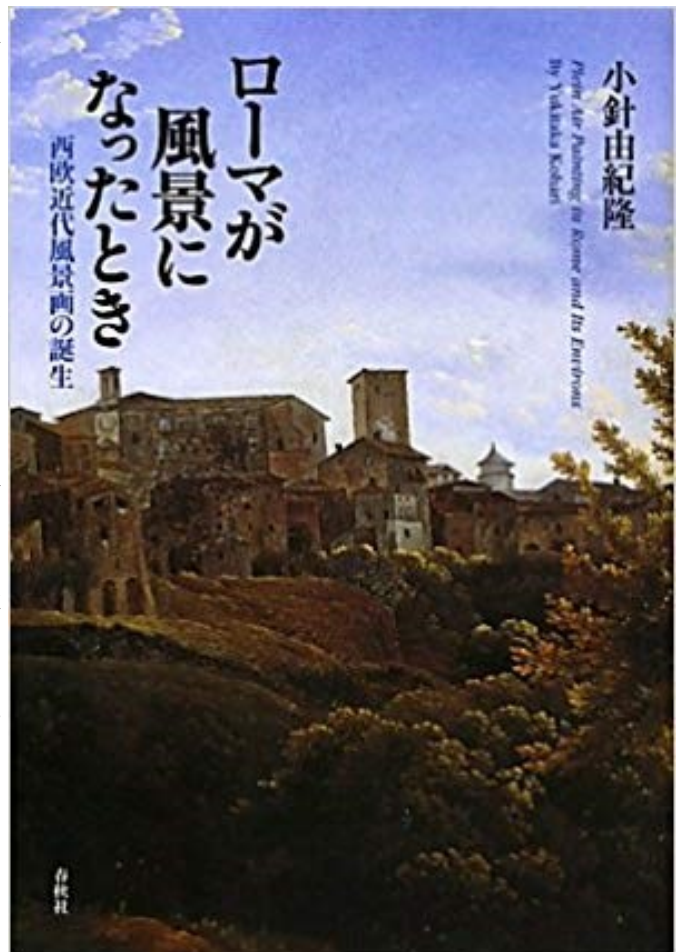
さて、西洋近代風景画がどのように生まれてきたかを考察するのは、風景画を美の規範として受け入れてきた西洋人の内奥の心の壁を読むことになるのではないか。そして、西洋人にとっての古典的な場としてのローマは美の奥儀を繰り広げる風景を提示してきたというらしい。「17世紀の西洋風景画は、イタリアとオランダで興隆した。イタリア、特にローマではクロード・ロラン（1604－1682）やニコラ・プッサン（1594－1665）による古典的風景画が形成され、以降19世紀までその影響力は衰える事がなかった」という。ローマを目指した二人は共々フランス人であり、西洋風景画の発展の出発点にあったのがこのふたりであるという。

この時代の絵画はすべてアトリエで制作していた。「人間が自分を取り巻く自然を表現する。ここには二つの自然がある。即ち、あるべき自然とあるがままの自然であり、言い換えれば、理想化された自然と現実の自然である。」風景画もこの時代はどちらかと言えば室内において理想化された自然を描いていた。そこに、現実の自然を求めて、ロランらは油絵の具を室外に持ち出し、「自然の中で生じた変わりゆく大気と光の多様で実に見事な観察」を実践する。まさに現代では常識となってしまった風景を描くやり方が、ロランらによって始まったという。

ロランらがことさらローマにこだわった理由は何であろうか。「ローマに滞在した良質の文人も、この土地には人と自然との固有の関係が成立している点に気付いていた。ゲーテをはじめ、バイロン卿、スタンダー、スタール夫人、シャトーブリアンらはみなそうであった」という。そしてこの運動がどのように行われたか。「ローマにおける美術の興隆は、ローマ生まれの美術家ではなく、他の土地からやってきた美術家たちによって支えられていた」という。風景というものが殆ど旅行者によって発見されるという原理がここにも適用されているということであろう。

これらの運動は当然英国のジョン・コンスタブル（1776－1837）やウィリアム・ターナー（1775－1851）などの風景画家にも影響を与えていたのは当然であろう。これは「大気の風景画を全ヨーロッパ的動向へと導いたのもロマン主義時代に他ならなかった」のであり、これは現代のすべての人の風景を観る見方を支配しているはずである。私たちの風景を観る目は知らず知らずに西洋近代風景画の影響下にあることをもう一度認識すべきではないだろうか。

（斉藤全彦）



天地玄黄 ⑰「とびらを考える」

空間とは、物体が存在しないで空いている所。また、あらゆる方向への広がり。
この世界に存在するもの全ては、空間の中に存在するわけだが、
その中で、今回は、空間を分けるものに焦点を当てたいと思う。

それは、とびらである。

とびらは大きな空間を分ける役割があり、
その理由は、空間同士の用途を分ける場合や、雰囲気を変えたい場合など様々だろう。

この世界に住むものであれば、多くのとびらに出会う事だろう。
砂漠や草原に住む世界の人間であっても、建物がある以上、とびら（空間の区切り）は必ずある。

とびらは、必ず開閉する”動作”が伴う。
家や街を歩いているだけでも様々なとびらがあり、
上下左右、手前や奥と、多種多様な開閉方法を持つとびらがある。
つまり”とびら”というものは、開く方向に決まりがない。

私は、ある店に知人と集まったとき、とびらについて面白い体験をした。

その店にあったとびらは、左右どちらにも開閉できる、引き戸タイプのとびらだった。
そのとびらを観察していると、左に開く人と右に開く人がいた。

この集まりで、『なぜ、人によってとびらの開く方向を間違えるのか。』という話になった。

- ・とびらの位置
 - ・とびらの外観
 - ・開ける人の利き手など…
- 様々な要素が挙がった。



観察した中では、人がとびらに対して、どの位置にいるかが有力だった。
とびらに対して、右が近い場合は、右のとびらを左に開き、
とびらに対して、左が近い場合は、左のとびらを右に開いていた。

つまり、引き戸は、そのとびらを利用する場合に、
左右どちらに引かなければいけないという、制約がないということになる。
これは、利便性がよく、ストレスフリーなのではないかと思った。

引き戸は、開け放した状態にやすく、扉の開閉によるデッドスペースもない。
また、バリアフリーの観点からも、上吊り式の引き戸であればレールによる段差もなく多用されやすい。

実際、家の中や、街中を歩いてみても、
ドア（開き戸）よりも引き戸の方が圧倒的に多いことがわかる。
襖や障子、ガラス窓、自動ドアなども全て横に引く。

これだけ日本人にとって馴染みの深い引き戸だが、
海外ではどうなのだろうか。
私のイメージでは、日本と違いドア（開き戸）が多い気がしている。

次回は、海外のとびらについて考えてみたい。

ゆき

〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan